

わが街熊谷遺跡めぐり

前中西遺跡

1 はじめに

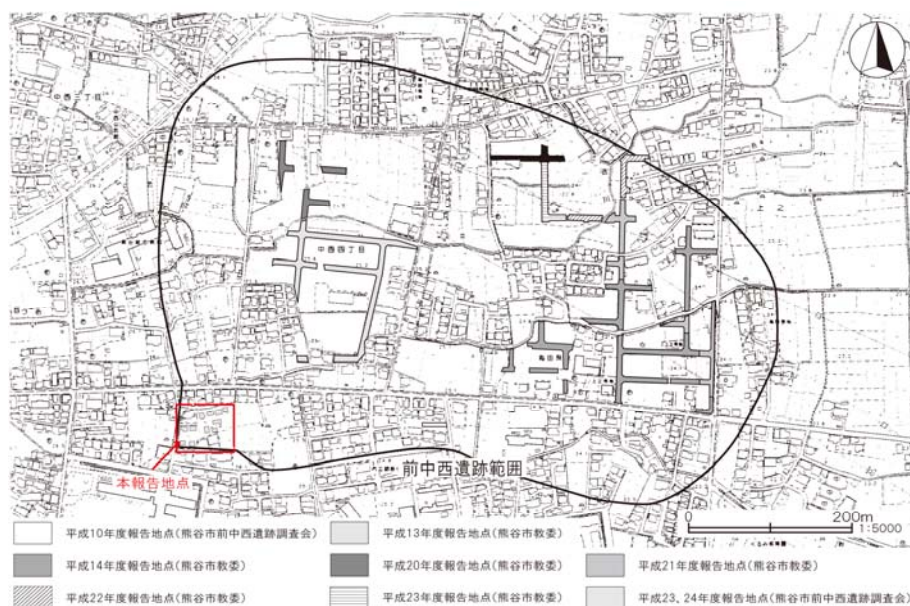
前中西遺跡は、平成 8 年度から発掘調査を行っており、弥生時代から近世に至るまでの遺構・遺物が多数検出されています。主体となる弥生時代は、中期中葉から後期前半にかけて継続的に営まれた、総面積約 30ha の関東屈指の大規模集落であることが確認されています。

弥生時代の集落は、中期中葉から後期前半まで継続し、80 軒程の住居跡が確認されています。遺跡範囲北東の衣川北側に遺構・遺物が突出して検出されている地点があり、本集落の中心部であることが確認されています。

2 前中西遺跡の調査

今回報告する地点は、遺跡範囲南西隅に位置します。発掘調査箇所は、街路築造箇所（第 1・2 調査区）と、住宅建築箇所（第 3～13 調査区）に分かれ、調査面積は 620 m²です。

検出された遺構は、弥生時代の方形周溝墓 1 基、礫床木棺墓 4 基、溝跡 11 基、古墳時代の住居跡 7 軒、掘立柱建物跡 8 棟、溝跡 7 条、土坑 27 基、ピット 232 基、井戸跡 1 基です。本調査地点は、弥生時代は墓域、古墳時代は集落域として土地利用されていたと判断されます。



前中西遺跡の範囲と調査地点

3. 礫床木棺墓群

今回の調査で特筆される成果として、弥生時代中期後半に属する方形周溝墓と礫床木棺墓からなる墓域が新たに確認されたことが挙げられます。

礫床木棺墓は、第6調査区で4基確認されており、第3号礫床木棺墓が東西方向に主軸方位をほぼ揃えて並び、第4号礫床木棺墓が南北方向に主軸方位を揃えてほぼ直行しています。

第1号礫床木棺墓：平面形は長方形。長軸 2.71m×短軸 0.82m×深さ 0.08m。坑底両端に木口ピットが掘り込まれる。両木口ピット最深部間距離 1.78m。敷礫総数 3,264 点、総重量 3,900g。副葬品：管玉 44 点（赤玉石製 12 点、緑色凝灰岩製 32 点）。

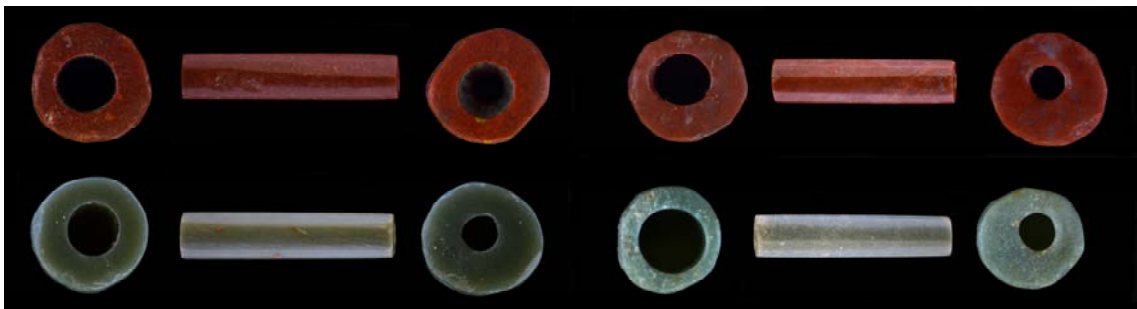
第2号礫床木棺墓：平面形は長方形。長軸 1.31m×短軸 0.72m×深さ 0.05 m。坑底両端に木口ピットが掘り込まれる。両木口ピット最深部間距離 1.10m。敷礫総数 1,471 点、総重量 8,100 g。副葬品：無し。

第3号礫床木棺墓：平面形は長方形。長軸 1.91m×短軸 0.92m×深さ 0.13 m。坑底両端に木口ピットが掘り込まれる。両木口ピット最深部間距離 1.40m。敷礫総数 22,757 点、総重量 49,940g。副葬品：管玉 117 点（赤玉石 41 点、緑色凝灰岩 76 点）。

第4号礫床木棺墓：平面形は長方形。長軸 1.93m×短軸 0.72m×深さ 0.21 m。坑底両端に木口ピットが掘り込まれる。両木口ピット最深部間距離 1.65m。敷礫総数 3,393 点、総重量 45,000g。副葬品：無し。

4基の墓の構造は同じであるが、規模および副葬品の有無に明確な差が存在しており、墓群内の集団に何らかの階層差が存在していた可能性が推測されます。第1・3号礫床木棺墓より出土した副葬品の管玉は、東西方向の埋葬部の東側に偏って出土していることから、頭～胸飾りとしての着葬品と考えられ、頭位推定の根拠となります。

管玉の法量は、緑色凝灰岩製が直径 2.4 mm～3.5 mm、全長 5.2 mm～20.6 mm、赤玉石製が直径 2.4 mm～3.3 mm、全長 6.2 mm～15.8 mmの範囲に分布する。両石材の法量は凝集的で、緑色凝灰岩に比べ赤玉石の法量が小さいことが指摘されます。



礫床木棺墓出土管玉実態顕微鏡写真（上段：赤玉石 下段緑色凝灰岩）

礫床木棺墓の帰属時期は、管玉の製作技法および敷礫中に混入していた土器小片より判断して弥生時代中期後半と判断されます。

この礫床木棺墓は、長野県の北・中信地域を中心に北陸から北関東までを分布範囲とする弥生時代中期後半に属する栗林式土器文化圏における重要な墓制と考えられています。

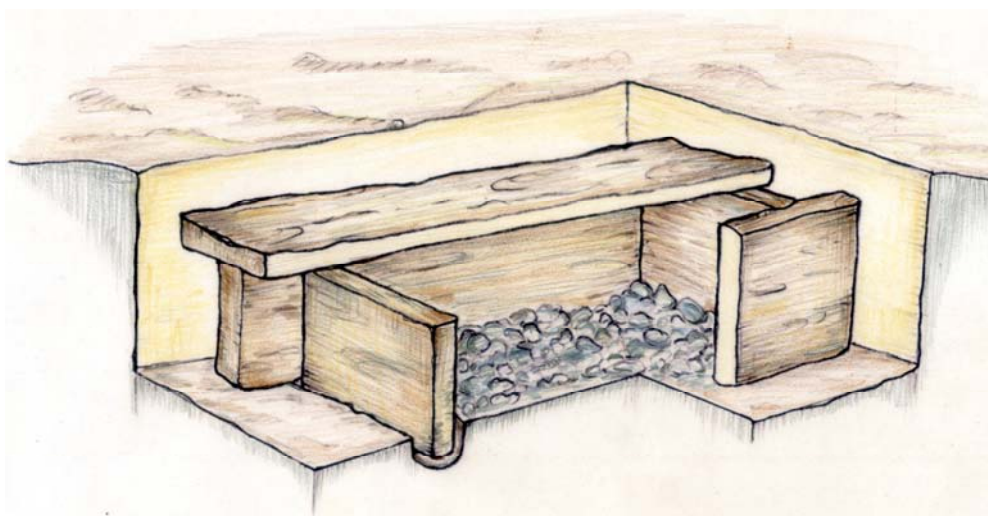
市内ではこれまで、1991年に荒川右岸に位置する船木遺跡において、大里村南部遺跡群調査会によって礫床木棺墓1基が調査されていましたが、副葬品は無く、古墳時代前期の方形周溝墓に切られて検出されていることから、時期的には古墳時代前期以前としか判断できませんでした。

今回の調査では、礫床木棺墓の時期が、弥生時代中期後半に特定されたことにより、北・中信地域外で初めての確認例となります。

本遺跡第3号礫床木棺墓出土の管玉数は117点を数え、長野県内最多の管玉が出土した中野市柳沢遺跡6A区第1号礫床木棺墓出土数101点よりも検出数では上回ります。この柳沢遺跡第6A区礫床木棺墓群は18基の礫床木棺墓により構成され、周溝を有している。柳沢遺跡6A区第1号礫床木棺墓と他の墓との間には規模・構造と副葬品の出土量に明確な格差が存在していることが特徴となっています。

この柳沢遺跡6A区第1号礫床木棺墓出土管玉の法量は、緑色凝灰岩製は直径2.0mm～3.0mm、全長5.0mm～16.0mmの範囲に分布し、赤玉石製は直径2.2mm～2.5mm、全長5.2mm～14.0mmの範囲に分布する。本遺跡出土管玉と比べ、直径・全長とも小型であることが指摘されます。

管玉は、生産地もしくは生産集団毎に法量に違いがあることが指摘されていることから、本遺跡との法量の違いは、管玉の生産遺跡および入手ルートが異なっていることが考えられます。



礫床木棺墓想定復元図

4. まとめ

本遺跡周辺の弥生時代中期後半の遺跡は、在地系の土器型式を保持しながらも、中期末になると外来系土器型式である栗林式系土器に置き換わります。このような現象の中、礫床木棺墓という新しい墓制も、長野県の北・中信地域からもたらされたものと理解されます。

今後、このような外来系文化の受容という大きな文化的画期の中における一つの重要な要素として、礫床木棺墓という新しい墓制の受容を位置づけていかなければならないと考えます。



第6 調査区礫床木棺墓群



第4号礫床木棺墓



第1号礫床木棺墓出土管玉



第3号礫床木棺墓出土管玉

平成26年9月8日発行

熊谷市立江南文化財センター(熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係)

— わが街熊谷遺跡めぐり — 前中西遺跡 テーマ展解説書第19集